『としょかん村』
(第1号：2009.4.1)季刊
〒162-0822 東京都新宿区下宮比町2-28
飯田橋ハイタウン518
としょかん村(発行)

心揺さぶる図書館の誕生

東近江市立蒲生図書館を訪ねて

才津原哲弘

「あかねさす紫野行き」、蒲生路へ

昨年(2008年)の11月1日、ＪＲ京都駅で琵琶湖線に乗り、近江八幡駅で近江鉄道に乗りかえ。無人駅の桜川で下車。爽やかな秋空の下、その日開館する東近江市立蒲生（がもう）図書館に向かった。旧・蒲生町（人口1万4,700人、面積34ｋ㎡）は能登川町と共に、2006年1月、東近江市に編入合併した。その東近江市自体が、前年の2005年2月に八日市市、五個荘町、湖東町、永源寺町、愛東町の1市4町が合併して新しく生まれた市で、それに能登川町と蒲生町が加わったことで、鈴鹿山系から琵琶湖に至る面積383ｋ㎡、人口11万7千人の市となった。合併した7つの自治体のうち、唯一、公立図書館がなかったのが蒲生町で、東近江市では旧蒲生町役場を改築して蒲生支所とし、その1階の大部分を地域の図書館とすることとし、合併に伴う新市の重要施策として、この日の開館に向けて、市、教育委員会をあげて取り組んできたのだった。

10分ばかり歩くと、川向こう左手にどっしりとした3階建てのコンクリートの建物が見えてきた。玄関の自動ドアから中に入ると、そこは石張りのラウンジで、正面の壁際には「おしらせ」と「新しくはいった本」の展示架、その左側には、この日は休日のため閉じられていたが市民生活課の窓口があった。図書館の開架室はその右手に広がっていて、まだ見ることはできない。

▲この蒲生支所の1階に図書館がある

ラウンジの真ん中あたりに、二つの低いテーブルをはさんで、四脚の椅子が向き合って置かれていた。ラウンジに足を踏み入れた時、最初に目を引かれたのは、背の高いゆったりとしたその椅子だった。その椅子がそこにあることで、空間全体が新たな命ある場所になっている。人の手で丹念につくられたものが放つ品格とでもいったもの、そのようなものでこそ、小さな子どもたちからお年寄りまで、地域の人たちすべてを迎えたい。小さな時から、だれもが、ほんものに触れて育ってほしい。地域の図書館の開設準備に携わった職員の人たちの、そんな心意気が感じられた。

心弾む開架室

自動ドアの入り口から、突き当たり壁面の新刊の展示架のところまで進むと、右手にコルクの床の、奥に長く深く広がる開架室が目にとびこんできた。その瞬間、まだ開架室のとば口に立ったばかりであるのに、心揺さぶられる思いがした。町役場であったときとは、まったく異なる空間が目の前にあった。温かで心弾む、清楚で凛とした空間が広がっていた。このようにも変わるものか。

私は行き交う人たちと交差しない所にしばらく立って、出入りする人と、館内の様子を見ていた。入口周り左手は児童書のスペースになっていて、子どもたちだけでなく、大人の方たちも、手にした本に熱心に見入っている。児童書のスペースの

終わる辺りに、サービスデスクがあり、その先が一般書のスペースになっているようだ。（後で、児童書の「料理」や「つり」など、そして「自然科学」の大部分が一般書と混配され、それぞれ「くらしのコーナー」や「体と自然を考えるコーナー」に置かれていることがわかった）。

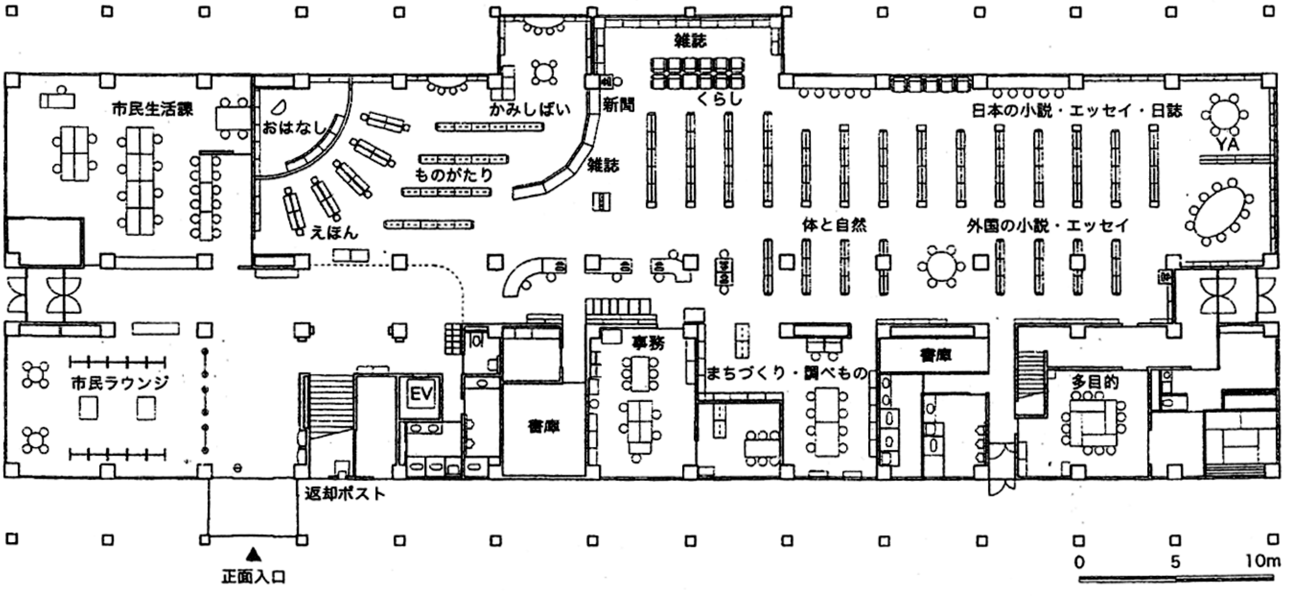
児童書の所でもそうだったが、一般書の本棚でも、本の表紙が見える棚になっていて、つい足をとめて手に取りたくなる本が次々に目にとびこんでくる。開館時45,000冊の蒲生図書館の本棚は一連ごとに、実に新鮮で、興味を引かれる棚であることに驚いた。よく選ばれた本と本の見せ方の工夫。開館準備に当たった担当職員はもとより、館長の巽照子さんの指揮のもと、東近江市の6館の図書館の活動の実績と職員の力の結集が、図書館の命である選書にも現れていることを強く感じた。

足をとめたくなるサイン

本棚のサインについても、そのことが思われた。東近江市の図書館では、利用しやすい図書館にするため、とりわけ書架のサインや本の配置をどのようなものにするかを考え、工夫を重ねてきたのだが、蒲生図書館では、これらの経験の上にたって、蒲生の空間にあった蒲生独自のサインとなっていた。『くらしのコーナー』では「きょうのごはんは何にする？」「お台所のいろいろ」「食べものについて考える」「きれいになる」「家をたてる」「家をもっとすてきに」「服をつくる」「チクチクはたのしい」、福祉、介護の棚のサインは「みんないっしょに生きていく」「お年寄りと暮らす」。また、『体と自然を考えるコーナー』では、農業、林業、庭づくりが、それぞれ、「田んぼや畑であせをかく」「林・森・山の中」「庭ですごす」となっていた。主婦と思われる方が、しばらく立っておられた棚のサインは「家族を考える」、その後は「社会のしくみ」だった。このようにすべての棚に、よく考えられた、利用者を誘い込むサインがあった。

場の力ということ

その図書館の家具―書架や机や椅子がどのようなものか、その造りや配置の仕方は、利用のしやすさはもとより、図書館の空間がどのようなものになるかということに大きく関わっている。能登川図書館では、特注家具の製作に当たっては、山形にある家具製作会社と協議に協議を重ねて、私たちが望む家具作りに力をつくした。その時、準備室で共にその協議に参加した職員の西澤和江さんが、この度の蒲生図書館準備室に配置された２名の司書のうちの１人だった。彼女は能登川で児童サービスの経験のある職員を全国公募で募集した時、九州から応募し採用されたのだが、福岡県内の人口5万人程の町の開設準備を中核になって行



▼幼いこどもたちと、やさしい家具

なっていたので、図書館の開設準備に当たるのは、蒲生で３度目のことだ。

蒲生図書館の一般書の基本となっている書架をみると、4段の高さ（約141センチ）で、実際は５段書架として使える書架となっていた（能登川では、1段多い）。段数が多い程多くの本を置けるが、それだけ書架が高くなり、本が見えにくく、取りにくくなる。能登川より1段少なくなっている理由の一つは、蒲生では最下段の棚の高さを能登川より十数センチ高くしているためと思われる。本棚の一番下の棚の本も、その棚が低ければ低い程、取りにくくなる。1985年に開館した八日市図書館の書架は、このことに配慮して６段書架とせず、５段書架として、最下段の棚をより高い高さにしている。つまり上記の点では蒲生の書架は八日市と能登川の経験を下敷きにしている。しかしそれだけではない。蒲生の開架室の広さ（800㎡）や、天井の高さを考慮した蒲生ならではの検討と決断がなされている。

一図書館員としては、図書館の命は何よりも本であり、800㎡という広さを考えると、より多く本を置けるよう、基本の書架を6段の高さの書架と考えたいところだ。しかし、そうすると、天井が高くないため、開架室は全体を見通すことのできない空間になるだろう。何か、心さやかにならない感じ。開架室の図書の収納冊数を５万冊とした上で、５段の高さの書架とする。そこには場としての図書館への深い思いがある。その決断の背後には、図書館の場が単に本のある場所ではなく、利用者ひとりひとりに、その場にいることが、心うれしい場となるようにとの祈りともいえる思いがあったのではないかと思われた。

“公共の場”に求められるもの

また、木製家具の場合、その形状だけではなく、しっかりした、確かな材質のものが欠かせないことはいうまでもない。思いをこめ力をつくして質高く作られたものに、幼い時から触れて育つということの意味合い、住民のだれもが日々の暮らしの場で、そのようなものに接する場をつくることこそ、公共という場に求められていることだと思う。乳母車に乗った赤ちゃんからお年寄りまで、地域のすべての年代の人が、日々そして生涯にわたって学び、集い、憩う場である図書館には、力をつくしての最上の場づくりが求められる。

東近江市の7つの図書館の館長である巽照子さんは、彼女が信頼する建築家と力をあわせて、2000年に、当時人口6,000人の永源寺町に、町民が誇りとする図書館を始めた人でもあるが、蒲生図書館の改築に当たって、まず設計担当者を、永源寺図書館と能登川図書館に案内して、蒲生図書館の家具は永源寺、能登川図書館の家具を最低のベースとして考えるようにと話したという。

1000倍広いな！

家具といえば、館内のそこここに、つい座ってみたくなる椅子やソファーがある。巧みに配置された、実に多様で豊かな居心地を感じさせる読書の場を、もうずっと前から利用していたかのように、子どもも大人もお年寄りも、ひとりひとり、自

分の場として利用している。開館初日のこの日、巽館長は、カウンター近くで小学生の男の子が友達に話しかける、こんな言葉を耳にしている。「おおきいなあ！　前の図書館（公民館図書室、188㎡）の1000倍ぐらい広いのとちがうか？」

また、クラブ帰りなのか、中学生がスキップしながら入ってきて、「ゆっくりできるぐらい広いなあ」と言ったという。八日市図書館の利用者が、実際は八日市図書館の方が広いのだが、蒲生図書館に来て、「天井が高く、八日市の図書館より広いなあ」と言われた由。

いずれも、蒲生図書館の空間の魅力をよく伝えてくれるエピソードであるが、同時に、この日に向けて、１名の正規職員の司書を公募により採用して（それまで派遣職員として公民館図書室に勤務していた松浦純子さん）、２名の正規職員の司書と司書有資格の臨時職員２名を配置するなど、東近江市がどれだけ本ものの図書館づくりに向けて、力をつくしてきたかを表わす話だと思えた。

花が迎える図書館

図書館オープンのこの日、私は昼前に蒲生図書館を辞した。そして翌日は、朝から夕方近くまで図書館で過ごした。開館２日目の図書館にやってきて、玄関の自動ドアが開いたとき、ラウンジに立っている２人の女性の笑顔が目にとびこんできた。巽館長と、図書館の近くに住む岡崎正子さんだった。二人はこの日から「市民ラウンジ」で始まる『小畠由佳里（こばたけ　ゆかり）作品展　ペンは友だち　えのぐはごちそう』の展示の準備をしているところだった。岡崎さんとは昨日フロアでお会いし、「蒲生図書館に、とっても満足です。」という心からの言葉を耳にし感慨深いものがあった。蒲生図書館開館までには長い経緯があり、2001年には「蒲生町立図書館設立委員会」が設置され、その後、図書館用地を購入し、図書館開設準備室長、図書館長となる人を懸命に探していたが、合併となり、新館建設は困難となり、町役場を改築してということになったのだった。蒲生の住民が待ちに待った図書館だった。

この２日間、蒲生図書館にいて深く印象に残ったのは、館内のあちこち十数か所におかれた生け花だった。すべて岡崎さんが生けたものだった。臨時職員で司書の吉田さんの言葉が耳に残った。「花があることで、利用者もきれいに使ってくださっている。」岡崎さんは開館前日の10月31日の夜、ラウンジで行われた「よし笛コンサート＆図書館見学会」にもよし笛を吹いて参加された由。隣の公民館に大きくて立派なホールがあるとのことだが、狭くとも、図書館のラウンジでということであったようだ。

みんなの図書館をみんなの手で

「みんなの図書館をみんなの手で」は、蒲生図書館開館直前に、その時は準備室の職員だった司書の西澤さんが東近江市の職員に向けて書いた蒲生図書館開館案内の文章のタイトルだ。その中に、開館前に行なった利用者懇談会で、「みんなで図書館づくりができないか」という意見があり、家庭で眠っている布地を募集して図書館バッグが作られるようになった経緯が記されている。そして、「『みんなの図書館をみんなの手で』との思いが形になって、最初の一歩が踏み出せたことをとてもうれしく思います。みなさんも、ぜひ、蒲生図書館に来てください」と結ばれていた。

「市民と共に育ち、市民が育てる図書館」が、東近江市立図書館が目指す要の目標であるが、蒲生図書館の最初の一歩を、市民と共に歩み始めたことをうれしく思った。そして図書館と共に歩む市民の動きを目にして、心励まされる思いで蒲生図書館を後にした。合併しても未だ、役立つ図書館が身近にない人に、ぜひ訪ねてほしい図書館です。

（11月開館以来４ヶ月間の貸出冊数は、通年に換算すると、蒲生地区市民１人当り10冊で公民館図書室時の5倍、改築費用は1億4千万円で、土地代を考えると、新築の場合の3分の1以下である。図書費5,000万円。）